

## シンポジウム 「十八世紀の東アジアにおける戴震」

小島 毅

清朝考証学の泰斗戴震の生年は時憲暦では雍正元年（一七二三）だが、十二月二十四日（グレゴリオ暦では一月十九日）の生まれであるため現在は一七二四年生まれと表記されることが多い。そこで本学会では戴震（一七二四～一七七七）の生誕三〇〇周年を記念したシンポジウムを企画開催した。

報告をお願いしたのは三名。石井剛氏は中国近現代思想史の研究者で『戴震と中国近代哲学―漢学から哲学へ』（知泉書院）などで知られる。種村和史氏は『詩経解釈学の継承と変容―北宋詩経学を中心に据えて』（研文出版）という千頁の大冊を公刊したのち、近年は戴震についての論文も発表している。金光来氏は朝鮮儒学を専門とし、耐震と同時期に活躍していた李瀾（星湖、一六八一～一七六三）を扱った博士論文「星湖心学形成の研究―堅守と自得の折衷そして西学」でイエズス会系の漢訳靈魂論書の影響について論じている。三名にそれぞれの観点から報告してもらったのち、荻生徂徠（一六六六～一七二八）とその後学、すなわち十八世紀の日本儒学を研究している高山大毅氏に東アジアという観点を含めてコメントしてもらった。